

読書感想文

「五月の光の中で」を読んで

油谷中三年一組 永松 みどり

遺稿集を残した木村幸代さんは、一七歳という若さで、「骨肉腫」という病氣と闘ってこの世を去ってしまった。

何故私がこの遺稿集について書こうと思ったのかというと、幸代さんの足の痛みは膝から始った。

現在私自身の足にも鋭い痛みを感じ、それが膝であることから恐怖と不安を抑えることが出来なかつたし、少しでも幸代さんの心のうちに触れて、わかってあげるこ

とが出来ると思ったからだ。

実際、誰もが経験している辛さ、苦しみ、悲しみは「自分一人で乗り越えていくしかない」と幸代さんは言っていた。誰かに頼りすぎたり、自分に甘えてはいないか、

又、時には「自分の苦しみなどおまえにわかるものか」とやつ当たりしたり。でも結局は自分との闘いであって自分で乗り越えられるだけの根性、体力、精神力があるかどうかだと思う。幸代さんはその力ある限り病氣と闘った。

幸代さんの右足は、たったの五年と九ヶ月目で無くなった。切

断だ。「母ちゃんの左足でそと右足を探したら無かつた。」(君

右足)がちゃんとあるべき場所についてくれることを、本当に祈っていたよ。」と幸代さんの言葉が私の心に強く深くのこっている。幸代さんは泣いた。幸代さんを知るすべての人も涙にくれていた。義足をつける。運動オンチの幸代さんは

たかっただよう。又、心の片隅で「私もこうなるのかあ。」と思っていたのかもしれない。それから吐き気、腹痛、発熱、手の痺れわずか、四〇kgもならない体、おまけに片足を無くした幸代さん。想像しただけで逃げ出したくなるような入院生活。実際に体験した人でないとわからない苦しみだ。「何故、こんなに苦しまなければいけないのか。」幸代さんは心の中でそう叫んだに違いないだろう。義足で歩くのも上手になつたころだった。強い抗ガン剤治療のため肝臓機能が悪くなり「少し安静にして肝臓の治療をしよう」と歩行禁止。この時から二度と幸代さんの歩く姿は見られなくなつた。退院は夢の夢となつた。

「もう幸代さんを自由にさせてあげて、これ以上、幸代さんの体と心をめっちゃめっちゃにしないで。」と私は病氣に言いたい。肺に再発し手術を受けることになつた。左右の肺の二回の手術だ。これで三回目の手術。私はもう、いたたまれない気持ちになつた。ある夜中より吐き気と頭痛にお

たかっただよう。又、心の片隅で「私もこうなるのかあ。」と思っていたのかもしれない。それから吐き気、腹痛、発熱、手の痺れわずか、四〇kgもならない体、おまけに片足を無くした幸代さん。想像しただけで逃げ出したくなるような入院生活。実際に体験した人でないとわからない苦しみだ。「何故、こんなに苦しまなければいけないのか。」幸代さんは心の中でそう叫んだに違いないだろう。義足で歩くのも上手になつたころだった。強い抗ガン剤治療のため肝臓機能が悪くなり「少し安静にして肝臓の治療をしよう」と歩行禁止。この時から二度と幸代さんの歩く姿は見られなくなつた。退院は夢の夢となつた。

急いで状態が悪化した。「先生助けて。」死ぬのはいや。」と幸代さんは言った。でも、どうすることも出来ずに幸代さんは、静かに息を引きとつた。病名も知らずにひたすら幸代さんは闘ってきたのに、この辛く、苦しく、悲しかった二年間を幸代さんはこの一瞬どう思つただろうか。ただ、退院することだけを夢見て、可能性を信じて、ただただひたすらに、私自身の足はたいしたことではなかつた。でも、私はそれを幸代さんより幸運だとは思いたくない。何故なら、もし私が幸代さんと同じ運命を受けたなら、乗り越えていけるだけの根性、体力、精神力があるだろうかと考えてしまうのだ。自分自身に自信がないからだ。これから、それらを作り出すために、私の人生を一步一步踏み締めて、その一歩がどんな大切なものか考えてみたい。私は思う。現在の医学ですべての病氣を治すことが出来たらこんなに素晴らしいことはない、そして又、木村幸代さんすばらしい人であった。幸代さんは私の心に一生消えることのない人物であろう。御冥福を祈る。

バドミントン大会結果

(二月八日)

優 勝	
男子	山本 一光 組
	岡崎 勝美
女子	中村スミ子 組
	宗村マチ子

町民マラソン大会結果

(二月一四日)

5km 一位	向中 若田 浩
3km 一位	菱中 坂本 貴



油谷町駅伝大会終る

過る一月二日第二六回油谷町駅伝大会が文洋小学校前より伊上ヘルスセンター前まで一六、五kmを六区間に分け中学校九チーム、一般一二チーム計二二チームの参加を得て、沿道の町民多数の声援を受けて盛大に展開されました。中学校の部では菱海中A、地域部の部、伊上、職域の部、消防署西部出張所、オーブンの部、菱海中OBチームが、それぞれ、優勝杯を手に入れました。